身の回りの循環を考える

「循環とくらし」に感想を述べた後、第1号では「住環境とごみ」、この第2号では、繊維リサイクルをめぐる話題として「ファッションと環境」を取り上げました。使わなくなった衣類の再利用率やリサイクルのありか、衣類そのものの環境負荷から、そもそもおしゃれとは何かまで考えています。2011年1月22日には、資源循環学会関西支部の主催により「市民と学生のためのセミナー：衣の循環」が開催され、参加してきました。突っ込みどころ満載のセミナーで、楽しく聞かせていただきました。他のセミナーと掛けていたため、最後まで席に座ることはできませんでしたが、おそらく講演注釈であったことと思います。

容器包装リサイクルや自動車リサイクルなどは、日本では個別リサイクル法の対象とされていますが、法的にはリサイクルの対象とされていない繊維、その理由を「衣」の循環セミナーで講演された木村照夫先生（京都工業繊維大）は、有効なリサイクル方法がないためと考えておられます。木村先生が進めておられる多くの繊維リサイクルに関する研究開発プロジェクトで、いよいよリサイクル技術が用意されることを期待しなければなりませんが、加えて繊維製品のライフサイクルを通じての環境負荷は如何ほどか、どれだけの資源消費と効用があったかの産物であるのか、を今一度考える必要があるのです。セミナーで話された今一人の演者である岩地加世さん（工房「桜梅桜李」主宰）の難題に迫られてしまう

特に何よりも強くいます。繊維リサイクル法といった法制度に頼らない循環がなされば、もっともおしゃれなのかわかりませんが、ヒトの社会はそれほど賢明でないことも経験してきています。こうした点にも頭をはげさせながら、おしゃれの考え方を含め、この「循環とくらし」第2号を楽しくお読みしたいと思っています。

一般社団法人 廃棄物資源循環学会 会長 酒井 伸一